

## アメリカと日系アメリカ人

木下康仁

南カリフォルニアの冬はとても暖かい。アメリカのなかでも、この一帯は地中海式気候の影響で湿度は低く、雨は年間を通してほとんど降らない。気温の変動も少なく温暖である。

だから、日本と異り四季の変化は乏しく、慣れてくるとその单调さにあきてくる。とにかく明けても暮れても毎日が曇一つない快晴なのだ。しかも今年の冬は例年より暖かいということで、正月もTシャツで過ごせし、一月中旬に三〇度を越す日が続いたりした。空気が乾いているから景色がきれいだ。ロサンゼルスはスモッグの街ときいていたが、僕の住んでいる所では、それほどひどくない。風の強い日などコバルトブルーの空とヤシの並木きれいに刈り込まれた芝生の緑が美しい。ここには羨ましいほど緑がある。

アメリカに来てから、もうすぐ七カ月になる。僕は今、大学の近くのアパートで日系三世の友人と共同生活をしている。このあたりはロサンゼルス西の端でハリウッドに近い。それに自転車をとばすと二十分ほどで太平洋の海岸に出られる。サンタモニカ・ビーチという有名な海岸があり、夏には海水浴に

人が集まる。ときどき釣竿をかついで散歩に出かける。どういうわけかタコがよく釣れる。ほとんど毎日カリフォルニア大学のアジア系アメリカ人研究所に通っては日系移民史の資料を集めているが、たまにはコミュニティ活動しているアジア系学生グループに参加するので、かなり毎日が忙しい。しかし、快適な生活だ。毎朝昼食用にサンドウィッチをつくり、自転車で出かける。一般にアメリカの学生は質素だ。昼休みになると思い思いに芝生の上に席をとり、手製の簡単な昼食をとる。日本では考えられないようなのんびりした学生生活が営まれている。

アメリカに来たのには目的が二つあった。八月にミネソタ大学で開催された第二十六回日米学生会議に参加すること、会議終了後ロサンゼルスで日系人のアメリカ社会への同化と文化変容について調査することである。七月に日本を出発し、学生会議をはさんでアメリカの一周旅行をした。一カ月近く費やしたが、途中で家庭滞在などがあったためかなりの駆け足旅行になったのは残念だった。ハワイ経由でロサンゼルスに入り、ラスベガス―グランドキャニオン―ダラス―ニューオリ

ンズーミシシッピーニューヨークワシントンDC—シカゴ—ミネソタというコースをとった。そして二週間の会議の後、カナダ国境近くの自然公園でカヌーのキャンプ旅行をし、サンフランシスコを経てロサンゼルスにもどった。つまりカリフォルニアから南回りで一周したことになる。バスを使うことが多かったが、飛行機にもかなり乗った。道中いろいろなことがあった。夏の砂漠の焼けつくような暑さ、グランドキャニオンの雄大な自然造形、大峡谷に沈む夕日をながめながらぶりついた厚いステーキの味。とにかく全くスケールが桁はずれに大きい。ところが、テキサスを経て南部に入ると様相は一変する。暖かい湿った風が吹きつけむし暑い。アメリカ建国以前から続いている人種差別。だが、緊張した雰囲気は感じられず、白人も黒人も親しみやすく、どこか田舎じみたとつきやすさがあった。それがよく言われる「南部人の親切さ」なのかどうかはわからない。ニューオリズの黒人街の小便臭い路地裏で一晩中きいたジャズの迫力、ミシシッピー州の州都ジャクソンまでのバスから見かけた白人農場主の邸宅と密集した黒人のブラック住宅のコント

ラスト。南北戦争(civil war)というと即座に“the war between the states”と訂正を求めめる南部人気質。南北戦争のとき南部十三州によって独立した共和国の旗は、今もなおミシシッピー州の州旗の一部に残されている。北部に対する根強い対抗意識が感じられた。ニューヨークへは飛行機を使った。夜のニューヨーク。ポルノ映画と偶然目撃した路上のひったくり、さすがにニューヨークと感心してホテルにもどると、友人の部屋が荒され。パスポートと貴重品が盗まれていた。もう一つ驚いたのはホテルに老人の泊り客が多かったことだ。泊っているというより長期契約で生活しているのだ。孤独なのだろう、しきりと話しかけてきた。競争に勝った者だけが生き残れる社会では老人は切り捨てられる運命にあるのだろうか。ところでニューヨーク、ワシントンDC、シカゴを経てミネソタに入ってくると、また別のアメリカが顔をだす。この一帯はアメリカの穀倉地帯だ。大農場が延々とつづく。

差別が矛盾なく併存している南部も、ニューヨークも、そして、中東部の大農業地帯も全てアメリカの一つの顔なのだ。広大な国土にこれほど異質な地域差があり、それに人種的民族的背景を異にするアメリカ人の多様性が相乗され、その上に統一体としてのアメリカが存在しているとすれば、これはとてつもない、まるで怪物のようなものだ。「多様性のある統一」という表現にアメリカの社会矛盾とそれを解決しようとする巨大なエネルギーが感じられた。

九月のはじめサンフランシスコをまわってロサンゼルスにもどった。途中、フレズノというカリフォルニア州の中部都市の友人宅に三日ほど泊めてもらった。この街には日本人が多い。彼は日系三世であり、小農場を経営する両親は五十代に入ったばかりであろうか。日本語はほとんど話せない。ちょうどブドウの収穫時期にあたり忙しそうであった。日焼した浅黒い顔、節くれだった指。みんな山梨の田舎で土に生きる僕の両親と同じだ。アメリカに来て、はじめて故郷を思い出した。しかし、それもつかの間の感傷にすぎなかった。フライドチキンをかじりながらの一家団

樂のなかにとけこむことはできなかつたからだ。彼らはアメリカ人なのだと自分に言いきかせても奇異な気持ちが残った。祖父母は共に日本人でありながらアメリカで生れ育つたこの家族と日本で成長した僕を隔てるものこそ文化なのではないだろうか。生育環境が変れば人間も変ってしまう。文化のもろい一面を感じた。

アメリカは移民の国だ。一世より二世、二世よりは三世と世代が進むにつれ社会的にも上昇できる。この友人の場合も一世は契約農業労働者として渡米し、一代かけて少々の土地を手に入れた。二世である彼の父は農業経営者として経済的地位を築き、三世の友人は大学を卒業し、今のアメリカ社会で最も社会的評価の高い法律家をめざして、専門 (Law school) 学校に通っている。もっとも、こうした世代ごとのジャンプができるのは白人に限られており、日系人の特異性はマイノリティとして白人と同じパターンをたどって成功した点にある。

現在アメリカには約六十万の日本人がおり、その半数近くはハワイに集中している。本土では太平洋岸に多いが、なかでもロサン

ゼルスでは約七万人が在住している。また、リトルトーキョーの名で知られている海外最大の日系人街がある。ダウンタウンのほずれ一番街と二番街にまたがった一角には、通りをはさんで日本食堂・日本書店・日本衣服店あるいは日本食品のマーケットが軒をならべている。完全に日本語の世界である。南カリフォルニアの日系社会の中心となっている。文化面では「加州毎日」「羅府新報」という半英半邦字紙があり、他にラジオとテレビでの日本語放送も行なわれている。

日本からアメリカへ移民が渡り始めてからおよそ百年近くなる。今では一世は七十と八十歳、二世が四十と六十歳に達し、三世が二十と三十歳代に入ってきている。日系人の歴史は差別・偏見・排斥運動との苦しい闘いであった。とりわけ、太平洋戦争中は強制収容所に隔離され、大打撃をうけた経験がある。戦後、日米関係の好転も影響して日系人の評価は逆転した。そして、現在では最も成功した「模範的マイノリティ」と賞賛されるまでになった。たしかに戦後の日系人の進出は目ざましいものがある。高等教育の普及、ホワイトカラー職への進出、収入も白人と同等に

近い。あらゆる面で他のマイノリティを大きくひきはなし、白人中産階級化している。日系人の中にはこれを日本民族の優秀性によるものと信じ込んでいる人が少なくない。したがって、他のマイノリティを蔑視する傾向にある。当然のことであるが政治的には体制寄りの立場をとる。しかし、アメリカ社会に受け入れられているというわけではない。

僕は今、週二回シャロンという三世に日本語を教えている。彼女の家は日系人が成功しても白人以上にはなれない例だ。父親が整形外科医として成功するにつれ、一家が崩壊した。戦争中、強制収容所で高校まで過ごし、非常な苦難をのり越えてようやく医者として開業できた。日本的なものは一切捨て白人になりきろうとした。そして、収入が増すにつれて、狭いアパートから郊外の典型的な白人中産階級の住宅街に引っ越した。つまり、彼女の父は日本文化を意識的に排除し、全てにわたって白人化し、社会的に権威のある職業についた。だが、近隣の白人の反応は冷やかだった。マイノリティの侵入を極度に恐れる白人の地域的排斥性というアメリカ特有の事情がある。彼女一家は完全に孤立し近

所付きあいはなかった。社会的接触をたれた母親は、ノイローゼになり、家から一步も出られなくなった。彼女も白人の中の一つの日本人となり友人のできないまま高校を卒業した。そして、父親はアルコールに逃げ道を求めた。

一世・二世が勤勉・忍従・教育重視といった日本文化の価値観念に支えられながら自らの独自性を犠牲にし、白人中産階級の価値体系を取り入れることで獲得した「成功」が、逆にアメリカ社会の中で日系人を微妙な地位におくことになったのだ。皮が黄色で中身が白い「日系人バナナ」のジレンマである。

では、三世はこの問題をどう受けとめていくだろうか。アメリカ社会への同化が進んだだけに彼らには一世・二世と異った考えがみられる。つまり、結果だけを見て日系人の優秀さを誇るよりも差別と偏見に目を移し、日系人として他のマイノリティと同じであるという点から出発する。ブラック・パワー運動の影響のもとにイエロー・パワーが叫ばれるようになった裏にはこうした反体制的な三世の動きがあったのである。彼らは、日系人であるよりも、よりアジア系アメリカ人たらんとす

る。他方、政治的でない三世のなかには、年老いた一世のための奉仕活動を組織しているグループがある。その最も有名なのがパイオニア・プロジェクトである。参加している三世の多くが日本語を習ったり、日本の伝統芸能を学んでおり、総じて日本文化への関心は高いと言える。政治的であるなしを問わず、三世で日本文化に興味を示す者はかなり多い。そして、同じ三世のなかでも日系人という枠をより固定化することで、アメリカ社会に同化していかうとするグループと、白人と黒人に対して第三の勢力となるために日系人という枠をより取りはずしやすくし、他のアジア系アメリカ人との連帯をはかろうとするグループに分かれるようだ。いずれにしても、一世はもちろん、二世すら驚くほど同化が進み、従来の日系社会から離れていく三世が、アメリカ社会で適応していくために逆に日本文化に日系アメリカ人としての存在証明を求めようとする傾向があるのは興味深い現象である。

一世は忠君愛国に燃えた明治の日本人であった。苛酷な労働に耐えながらいつの日か故郷に錦を飾るのを夢みた出稼ぎ移民がほとん

どであった。一方、二世は家庭では日本人としてしつけられながらも、一歩外に出ればアメリカ人としての行動を期待されるという、日本文化とアメリカ文化の板ばさみにあいながらも優等生であろうと努めた。そして、太平洋戦争には強制収容所からアメリカへの忠誠を示すため志願兵として出征した。戦後に生まれ日系人の社会的評価が高まる中で成長した三世には一世や二世の苦難な過去は昔の出来事ではない。だから、三世は苦勞を知らない甘やかされた世代だという批判がされる。彼らがこれにどう応えるかは今後の課題であろう。

僕の日系人の勉強はまだ途中である。いざ報告書を出さなければならぬが、ただ、日本人がアメリカに渡り、その後の百年近い変遷をみると、日本文化が異文化の中にもち込まれると比較的容易に変容されやすいという特徴があるように思われる。だが、それが食生活、行動様式といった外面的部分だけなのか人間の内面すなわち考え、価値観にまで及んでいるのか、これからの勉強で明らかにしてみようと思う。

(本学社会学部社会学科四年次学生・松崎聖子金受領者)